

文化財 ニュース

15 2018



『婦人グラフ』大正 15 年 5 月号表紙絵

会期 平成 30 年 (2018) 5 月 19 日 (土)
～ 7 月 1 日 (日)

会場 東京ステーションギャラリー
(千代田区丸の内 1-9-1 東京駅丸の内北口)

開館時間 午前 10 時～午後 6 時
(金曜日は午後 8 時まで 入館は閉館の 30 分前まで)

休館日 毎週月曜日 (6 月 25 日をのぞく)

入館料 千代田区民無料 (※ P5 参照)
一般 900 (700) 円/高校・大学生 700 (500) 円/
中学生以下無料
() 内は前売料金 (5 月 18 日まで販売)
20 名以上の団体は、一般 800 円、高校・
大学生 600 円
障がい者手帳等持参の方は 100 円引き
(介添者 1 名は無料)

主催 千代田区
東京ステーションギャラリー
(公益財団法人東日本鉄道文化財団)
東京新聞

千代田区 × 東京ステーションギャラリー

共同企画特別展

「夢二繚乱」開催

Takehisa Yumeji : Master of Japanese Modern Illustration

千代田区は、平成 27 年 (2015) 11 月に区内出版社の龍星閣^{りゅうせいかく} (昭和 8 年 (1933) 創業) から、大正ロマンを代表する画家である竹久夢二 (1884～1934) に関する美術作品・資料約 1,200 点の寄贈を受けました。

今回の展示では、千代田区ミュージアム連絡会加盟館の東京ステーションギャラリーと共同で、千代田区に寄贈された龍星閣コレクションを中心に、初公開の作品を含む約 500 点を公開します。

竹久夢二は明治 42 年 (1909) に『夢二画集 春の巻』を刊行し、一躍有名になりました。そして生涯にわたって本や雑誌に自作の詩や物語を発表し、挿絵や装幀、楽譜の表紙絵などの出版物を数多く手がけ、画家としての業績を築いていきました。夢二は没後、世間から忘れられかけていましたが、その名に再び脚光を当て世に広めたのは、龍星閣を始めとする出版社でした。

展示では、夢二や龍星閣、その関係者が出版に託した思いと千代田区の出版文化も紹介します。



「夢二繚乱」



第1章 夢二のはじまり

若いころ、夢二は新聞、雑誌に絵や詩を投稿して生活の糧^{かて}を得ていました。転機となったのは、明治38年（1905）6月に雑誌『中学世界』へ投稿したコマ絵「筒井筒」^{つついづつ}が第一賞に入選したこと、そして明治42年（1909）に『夢二画集 春の巻』を刊行したことです。

展示では、それ以前の明治36年（1903）、早稲田実業学校に在学中に制作した手書きの画文集『揺籃』^{ようらん}を初公開し、外国文学の翻案^{ほん}や創作に挑んでいた若き日の夢二の姿も紹介します。初期の作例を通して、夢二がどのように画家として歩み始めたのか、夢二の原点に迫ります。



『夢二画集 春の巻』

見どころ① 初公開！夢二青年期の試作

画文集『揺籃』は、夢二が早稲田実業学校に在学中の明治36年（1903）に制作されました。外国文学の翻案や創作、4点の挿絵を含む手書きの冊子です。夢二の初期の作例は出版物に掲載されたコマ絵がよく知られていますが、画文集『揺籃』は現在知られている肉筆作品として最も若い時のものです。本文中には紫色の推敲^{すいこう}の跡が生々しく残り、夢二がこの試作を出版する計画を持っていたことが想像されます。



画文集『揺籃』表紙



第2章 可愛いもの、美しいもの

大正3年（1914）10月、日本橋区呉服町^{こふくちょう}（現・中央区八重洲一丁目）に「港屋絵草紙店」^{みなとや え ぞう し てん}が開店します。夢二が正式に結婚した唯一の女性・岸たまきが主人を務めた港屋は、夢二がデザインした千代紙、便箋^{びんせん}や封筒、半襟などを販売するブランドショップでした。また、恩地孝四郎^{おん ち こう し}や田中 恭吉^{たなか ぎょうきち}ら若い芸術家たちが集い、作品を発表できるギャラリーでもありました。

この時期には「夢二式美人」のスタイルが確立されただけでなく、絵葉書、雑誌の表紙や挿絵、本の装幀など、多方面にわたって夢二は活動を展開させていきました。自らの個展の開催にも意気込む一方で、人々の手に届く美術を提供し続けた夢二の幅広い画業を紹介します。



《港屋絵草紙店》



第3章 目で見る音楽

夢二は数多くの楽譜の表紙を描いています。代表的なのは、セノオ音楽出版社より発刊されたセノオ楽譜で、日本や世界各国の楽曲のイメージを様々なジャンルの要素を取り入れたデザインで表現しました。夢二は自ら作詞を手がけた「宵待草」^{よいまちぐさ}のほか 270 点余りの楽譜で、いわばジャケットを任されています。また、夢二は童謡の楽譜にも積極的に参加しました。夢二が描いた大正時代の豊かな音楽の世界をめぐる。



セノオ楽譜 No.259 原画《ロリタ》



セノオ楽譜 No.44 『蘭燈』

昼休みコンサート+講座 (入場無料)

日時：6月14日(木)

①コンサート 12時～13時

②講座 13時～14時

(事前申込不要、いずれも当日直接会場へ)

会場：千代田区役所 1 階 区民ホール

定員：①どなたでも

② 100 名 (先着順) ※①、②それぞれの参加可能

内容：①竹久夢二に関する大正時代の音楽を演奏

②竹久夢二が表紙を描いた楽譜に関する講座を展覧会
担当学芸員が実施

問い合わせ先：千代田区地域振興部文化振興課

電話：03 - 5211 - 3628



セノオ楽譜 No.106 『宵待草』

「夢二繚乱」



第4章 出帆

昭和2年（1927）に都新聞（現・東京新聞）で連載された『出帆』は、夢二の半生を綴った自伝小説です。挿絵には、彼の愛した女性たちや彼女たちと訪れた場所の風景、あるいは抽象的な心理描写などが水墨で描かれています。

見どころ②

初公開！自伝小説『出帆』挿絵原画

発表当時大きな話題となった『出帆』には、134点の挿絵が付けられました。展示では、この挿絵原画全てを一堂に初公開します。この時代の小説で、挿絵原画が全て残されているのは大変珍しい例です。夢二円熟期の傑作挿絵を存分にご堪能ください。



原画《出帆》

龍星閣コレクションには、夢二自作の『出帆』切抜帖が伝来しています。夢二と親交の深かった恩地孝四郎によれば、この切抜帖は夢二が自分で作ったものであり、原画とともに児童文化の研究者・天江富弥^{あまえとみや}のもとにあったといいます。夢二は『出帆』に愛着があり、出版を願いましたが実現しませんでした。その後、龍星閣が『出帆』原画を入手し、原画から直接製版して出版しました。

夢二は最初から『出帆』を本にする計画で、原画を大切に保管していましたが、昭和6年（1931）に海外へと旅立ったため、生前作者の手で本になることはありませんでした。夢二の願いであった『出帆』の書籍化は、夢二の思いを継いだ人々の手によって実現したのです。この展示では、夢二と交流した人々や夢二の画集刊行に尽力した龍星閣など、夢二を見出し、創作を支え、後世へと繋いだ出版活動について再考します。

（井上海）



原画《出帆》



竹久夢二切抜帖 出帆

千代田区民無料

東京ステーションギャラリーへの入館料は、千代田区在住者は無料となります。運転免許証や健康保険証など住所が確認できるものを提示してください。

配布期間 ～ 6月25日(月) ※土日を除く

配布場所 ①千代田区内各出張所(麹町/富士見/神保町/神田公園/万世橋/和泉橋)

②千代田区役所6階 文化振興課窓口

③千代田区立日比谷図書文化館4階 文化財事務室

配布時間 ①・② 午前8時30分～午後5時、③ 午前10時～午後6時

夢二繚乱展関連事業

参加者を募集中です。ご応募お待ちしております。



1. 講演会(事前申込制)

参加費 各500円 ※定員 ①・③ 200名、② 100名

	演題	開催日時	講師	会場	応募締切
①	「ジャーナリズムと竹久夢二」	5月31日(木) 午後7時から	西山純子 (千葉市美術館学芸員)	日比谷図書文化館 地下1階 大ホール	5月20日(日)
②	「出版活動と千代田、龍星閣コレクション」	6月5日(火) 午後2時から	井上海 (千代田区教育委員会) 聞き手: 富田章 (東京ステーション ギャラリー館長)	千代田区役所 1階 区民ホール	5月27日(日)
③	「装幀・出版からみた竹久夢二」	6月21日(木) 午後7時から	岩切信一郎(美術史家)	日比谷図書文化館 地下1階 大ホール	6月10日(日)

申込方法

往復はがきに ①講演会名 ②氏名・年齢 ③住所 ④電話番号 を記載し、各講演会の申込締切日までに申込先へ郵送してください(いずれも当日消印有効)。1講演会につき1枚、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。

申込先・問い合わせ

〒100-0012 千代田区日比谷公園1-4 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務室

電話: 03-3502-3348 FAX: 03-3502-3361

2. 東京ステーションギャラリーでのイベント

①ギャラリートーク[担当学芸員による展覧会解説]

日時: 5月31日(木)、6月14日(木) 15時～(約30分)

3階展示室集合/参加無料(要別途入館料)

事前申込不要 ※混雑時には中止することがあります。

②レンガ・タッチ&トーク[煉瓦が特徴的な東京ステーションギャラリーの建物解説]

日時: 5月24日(木)、6月7日(木) 15時～(約30分)

1階エントランス集合/参加無料(要別途入館料)

定員: 15名/当日1階受付でお申込みください

玉川上水の石枅・木樋（麹町三丁目2番地先出土）



麹町三丁目2番地先出土石枅（清水谷公園）

千代田区教育委員会は、平成30年4月1日付で「玉川上水の石枅・木樋（麹町三丁目2番地先出土）」の1件を新たに千代田区指定文化財としました。

今回指定した「玉川上水の石枅・木樋（麹町三丁目2番地先出土）」は、昭和45年に国道20号線（麹町大通り）の共同溝拡幅工事の際に発見されました。住所としては麹町三丁目2番地先で、江戸時代でいうと四谷大木戸から江戸城半蔵門に直結する甲州街道沿いの麹町五丁目地先にあたります。発見された石枅と木樋は出土地から考えて四谷大木戸に通じ、そこから江戸城内に引き込まれていた江戸上水の一つである玉川上水施設の一部となります。

玉川上水

江戸の町は、井戸を掘っても塩分の強い水が出るなど、江戸幕府開府当初から飲料水の確保に悩まされていました。さらに江戸の都市拡大に伴い、水の需要は増大し、幕府は上水道建設の必要に迫られました。

玉川上水は、4代将軍徳川家綱の命により、関東郡代伊奈半十郎忠治を上水奉行とし、承応2年（1653）に着工し、翌3年（1654）に竣工したと伝えられています。江戸城へ初めて通じた記録は明暦元年（1655）となっています。こ



麹町三丁目2番地先出土木樋（千代田区立日比谷図書文化館）

の上水は羽村で多摩川の水を取水し、四谷大木戸に至る約43kmを開渠（流水面が見える水路）で導水し、そこから江戸市中へは石樋や木樋による暗渠（地下に設けられている水路）で配水していました。

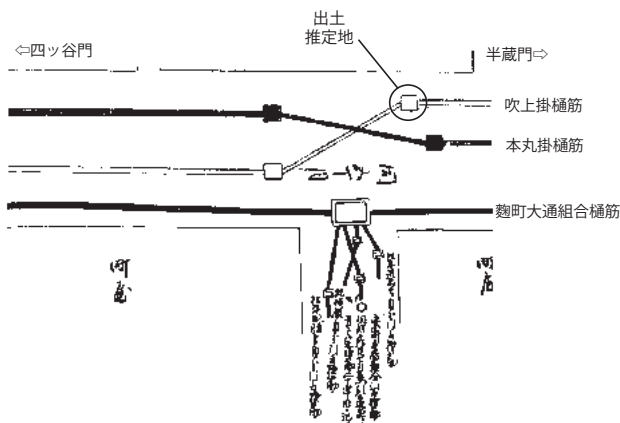
玉川上水は、神田上水と並ぶ江戸上水の重要幹線の一つで、飲料水だけでなく、防火用水、庭園の泉水用水、江戸城の堀用水など様々な機能を持つ、江戸の都市用水を供給した一大用水です。

寛政3年（1791）の『上水記』絵図によれば、四谷大木戸で虎ノ門へ向かう石樋から分岐した3本の樋筋は外堀を懸樋で渡り、甲州街道の地下を並行して半蔵門へ向かっています。3本の樋筋は北から本丸掛樋筋、吹上掛樋筋、麹町大通組合樋筋と呼ばれています。



玉川上水の経路（東京市役所『東京市史稿 上水篇 第一』1975年より）

今回の指定物件の出土地周辺では本丸掛樋筋と吹上掛樋筋は交差し、両樋筋は半蔵門で堀へ注水されたのち、江戸城本丸、吹上西の丸に送られます。



四谷大木戸～半蔵門間樋筋 本丸掛・吹上掛樋筋交差点
(江戸遺跡研究会『江戸の上水・下水』2006年)

石柵と木樋

江戸市中の上水は樋と柵を使って給水する方法で、水道網を整備しています。樋は送水管であり、石樋と木樋が一般的ですが、他には瓦樋や竹樋などの場合もあります。柵は主に貯水槽として一時的に水を溜めておく役割をもっています。また、柵は木または石でできており、樋を通すための穴があいています。

本石柵の外法は約 1.43 m の方形で、安山岩で作られています。4 段重ねると高さ約 3.65 m にもおよびます。各石柵の接合部はそれぞれ凹凸で、はめ込むようになっており、ずれ防止のためと考えられます。石柵の下から 1 段目と 2 段目にまたがる部分に木樋の挿入口があります。

木樋は、檜の板と板を組み合わせで作られており、一般的には舟釘と呼ばれるもので打ち付けられています。合せ目や釘穴には、漏水防止のために木の皮をつめています。本資料は出代（石柵の入水口・出水口の内側に木樋が入り込む部分）から継手（樋を繋ぎ合わせる部分）まで残っており、全長約 1.8 m です。出代には銅板が巻かれ、4 ～ 5 cm 間隔で銅鉾が打たれています。

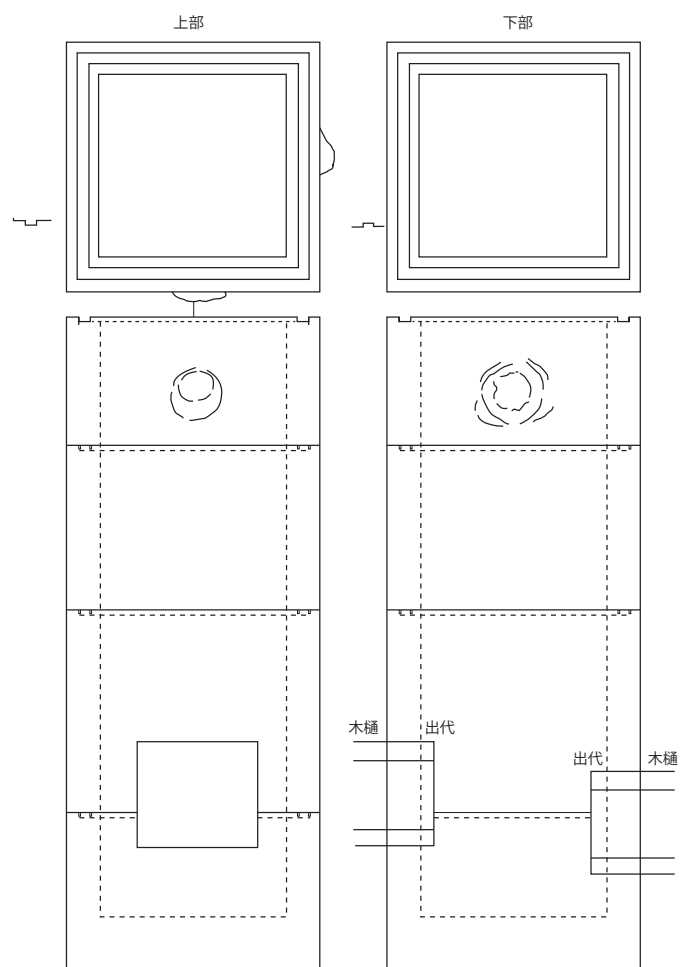
本資料が、地中深く、石柵が埋設されていたことは、江戸城へ向けて水位・水量などの水流制御装置

の役割を担っていたことが推定され、今のところ四谷門から半蔵門間だけで使用された技術と考えられます。

江戸時代の玉川上水施設で、これまでに石柵や木樋はそれぞれ発見されていますが、良好に残っているものは多くありません。ましてや本件は移設されているものの、出土地が明らかで、石柵・木樋と 2 つの組み合わせで残っているのは貴重な例といえます。

四谷大木戸から半蔵門間の樋筋の修理記録が乏しいなか、その区間の玉川上水管路の規模や普請の実態などを示すとともに、当時の玉川上水施設の一端を明らかにする貴重な実物資料です。また玉川上水は江戸市中における都市用水供給施設として極めて重要な役割を担っており、江戸時代の水利技術を理解するうえでも重要です。

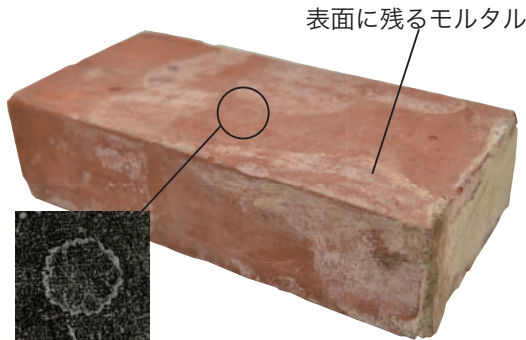
(小杉由希子)



石柵・木樋推定設置図

岩崎邸の煉瓦

「岩崎邸」といえば不忍池付近にある洋館が有名です。しかし、明治初期、岩崎邸は神田区（現在の千代田区）にありました。千代田区教育委員会は、岩崎邸の煉瓦^{れんが}を所蔵しています。その歴史をひも解いてみましょう。



小菅煉瓦製造所の刻印（拓本）

岩崎邸の煉瓦



明治21年（1888）、建設中のニコライ堂の足場から撮影した写真に写る駿河台の岩崎邸（『全東京展望写真帖』大塚巧芸社、1932年より）

駿河台の岩崎邸

三菱の創始者である岩崎弥太郎^{や たらう}は、明治7年（1874）に三菱商会の本拠地を大阪から東京へ移し、当初、本郷区湯島梅園町（現在の文京区湯島）に家を構え、明治10年（1877）に神田区駿河台東紅梅町（現在の千代田区神田駿河台：御茶ノ水ソラシティ）に転居します。後に岩崎家の本家は不忍池付近に新居^{や の すけ}を建てたため、駿河台の邸宅は弟の弥之助^{や の すけ}の持ち物となり、その息子の小弥太^{こ や た}に引き継がれます。大正12年（1923）、関東大震災で屋敷は崩壊しました。

桜の刻印とモルタル

当時の煉瓦には、工場ごとに独自の刻印がありました。この煉瓦の刻印はかなり摩耗していますが、拓本をとると五花弁の桜が浮かび上がります。この刻印は、明治5年（1872）に設立された小菅煉瓦製造^{こすげ}所のものと考えられます。

表面には、目地に塗られていたモルタルが白く残っており、実際にこの煉瓦が建材として用いられていたことが分かります。

現在、御茶ノ水ソラシティ（御茶ノ水駅・新御茶ノ水駅付近）には、岩崎邸の煉瓦を再利用した案内板や広場のベンチがあります。（長谷川怜）



都営地下鉄 ●三田線「内幸町駅」徒歩3分
東京メトロ ●千代田線
●日比谷線
●丸ノ内線

駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 午前10:00～午後10:00
土 午前10:00～午後7:00
日・祝 午前10:00～午後5:00
文化財事務局 月～金 午前10:00～午後6:00
※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。
休館日 毎月第3月曜日
年末年始（12月29日～1月3日）
特別整理期間

文化財ニュース 第15号 (2,000部)

発行日 平成30年5月15日

編集・発行 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務局
〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
TEL: 03-3502-3348 FAX: 03-3502-3361
HP: <http://edo-chiyoda.jp>
e-mail: bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp

印刷 株式会社サンワ